WEB PAGE VI

田畑益弘

太陽書房

目次

２００３年８月　・・・・・・・・・・・　5
２００３年９月　・・・・・・・・・・・　23
２００３年１０月　・・・・・・・・・・　40
２００３年１１月　・・・・・・・・・・　61
２００３年１２月　・・・・・・・・・・　79
２００４年１月　・・・・・・・・・・・　97
２００４年２月　・・・・・・・・・・・　114
２００４年３月　・・・・・・・・・・・　130
２００４年４月　・・・・・・・・・・・　150
２００４年５月　・・・・・・・・・・・　169
２００４年６月　・・・・・・・・・・・　184
２００４年７月　・・・・・・・・・・・　203

２００３年８月

母の忌の近づく夏の落葉かな

兜虫鎧の下の翅薄し

死に真似の上手な子供水鉄砲

青林檎噛みさしのまま愛はじまる

夏館みしりみしりと怖くなり

昼寝覚ブラウン管に嫌ひな奴

夜の蟻や一灯で済む一人きり

炎天に勝つもの巨き墓石のみ

雨に敗れぬ噴水を見てゐたる

かなかなのこゑむらさきに昏れてをり

花合歓の閉づれば開く面影よ

夏の灯や少なくなりし古本屋

ナイターの群集の中ふと孤独

ギターなど取り出だしたる夏夕べ

入り来たる蝶のよろこぶ夏座敷

亀売れず亀を叱りて亀売りは

蚊姥(かのうば)をゆるして老婆存ふる

したたかに烏の哄ふ旱かな

くらがりにひとり飯食ふ日の盛り

羽蟻舞ふかつて団欒ありし灯に

淋しさの果つることなき白夜かな

ぽつねんと昭和をおもふ裸足かな

文机に火星儀置きて涼しさよ

地球儀と火星儀並ぶ暑さかな

地球儀の汚れてをりし溽暑かな

香水の香の記憶あり名は忘れ

いとけなき草も刈りゆく黙(もだ)深く

靡(なび)きつつ藻草長けたり夏の河

蝿とんですぐに忘れてしまふこと

向き合ひてはにかみし日のかき氷

諍ひし愛せし西日思ふべし

唯一人を思ひつづくる冷し酒

月光も微熱帯びゐる夏祭

裸になればあばら骨摩る癖

寝返りて北を向きても熱帯夜

終りゆくものの暗澹土用波

走馬灯廻れどきのふにはならぬ

熱帯夜寝言を聞いてしまひけり

夏の風邪ひとに隠して引いてをり

夏の浜掘りて大人の遊ぶかな

やうやうに湖昏れかゝる洗鯉

海猫(ごめ)鳴くや人と別るる言葉なく

生くるとは食ふこと毛虫疑はず

蜘蛛下りる螺旋階段まつすぐに

熱帯魚ばかり殖えゆく孤独かな

遠花火終ふまで見し淋しさよ

独り言つおのれ怖ろし端居して

愛されず愛さず蛇のすゝみけり

われに似てまことすげなき金魚かな

大昼寝あの世も少し覗き来し

早も酔ふうらぶれし夜の冷酒は

己(し)がために己がしつらふる冷奴

訴ふる眼をして蛇の打たれけり

蝉しぐれ無数の蝉の屍(かばね)の上

蝉しぐれ精舎の鐘を凌ぎけり

手花火に序破急のあり見畢(みおわ)んぬ

夏の果比良山系に蝶失せし

夜の秋の誰が化身なる白き蝶

死ぬるとは忘らるること夜の秋

夜の秋の逢ひたるひとの七分袖

身の中の泉をおもふ癒ゆる日は

心地良く蹠(あなうら)乾く夏座敷

夏座敷腕立て伏せをしてをりぬ

畳昏らく衰ふる夏まぎれなし

忘られしボールが路に夏終る

きのふよりけふ波透きて秋立てり

人行けばまた木隠れて秋に入る

大路より小路すゞしく灯ともせり

回送車といふ涼しき灯が過る

炎天を閻王(えんおう)として畏れけり

蒼天や老ゆる間もなく蝉の死ぬ